

2023年度 タカラ・ハーモニストファンド 助成先 一覧

	助成先 代表者名	助成額 活動地域	テーマ 活動・研究の内容、目的、助成金の用途等
活動 の 部	あさひかわサケの会 寺島 一男	50万円 北海道	<b>石狩川の環境保全と生態系の回復を通して、石狩川上流部での野生サケ資源の回復事業</b>  1964年に旭川より下流の深川市内の石狩川に、農業用の頭首工(花園頭首工:固定式)が完成しました。以降石狩川中上流部でのサケの遡上を見る事ができなくなりました。1994年石狩川が「魚がのぼりやすい川づくり事業」の推進モデルに選ばれ、花園頭首工上段の撤去と魚道が設置されました。一応サケが旭川まで遡上できる条件が整いました。「大雪と石狩の自然を守る会」が1983年から行ってきた、「サケ受精卵孵化飼育・稚魚放流の市民運動」を発展的に受け継ぎ、石狩川及び近隣支流の河川環境の回復と保全を希求し、本会の活動趣旨を広く市民に浸透させて行くことにより、真に「石狩川を野生のサケのふるさと」にできると考えます。
	クリハラリス情報ネット 林 典子	50万円 神奈川県	<b>外来種クリハラリスの分布拡大を防ぎ、里山のムササビを護ろう</b>  神奈川県南部で1950年代に野生化した外来種クリハラリスが分布を広げ、今では丹沢山塊や多摩丘陵への侵入が危惧されている。本種は生息密度が高くなるため在来種への影響が指摘されている。多摩丘陵にはムササビの孤立個体群が存続するが、5km離れた地点でクリハラリスが近年捕獲された。両種は共にリス科に属し、巣場所や餌をめぐる競争種となる。本活動ではクリハラリスの分布拡大に伴う北上の現状を明らかにするとともに準絶滅危惧種ムササビの生息実態を明確にする。市民への普及啓発によってクリハラリスの情報を収集し、現場で生息確認を行い、捕獲優先地域を明確にする。その情報を行政による捕獲事業に提供し分布拡大を阻止する。
	NPO法人 森林楽校・森んこ 萩原 茂男	49.5万円 福井県	<b>里山林の再生事業</b>  当法人は暮らしのある里山の再生を主要な活動としている。里山林は里山の暮らしを支えるために、薪炭の生産や畑や田んぼの肥料(堆肥)として、また山菜や筍といった食材を確保する重要な森であり、広葉樹と針葉樹などの多様な植生のある森であった。しかし、里山での暮らしが消滅して里山林の機能は必要となくなり、木材生産のためにスギやヒノキが植樹され、多様な植生は失われた。さらに、木材価格の低迷から間伐が遅れ、下層植生も見られない林となっている。再び多様な植生を取り戻し、里山の暮らしを支える里山林に再生するのが、この事業の目的である。そのために、スギ・ヒノキの間伐を適切に行い、この地にあった広葉樹を植樹する。
	ダイトウコノハズク保全研究グループ 高木 昌興	50万円 沖縄県	<b>島民と共に自然を知り、島の自然を未来に残したい！ 「島まるごと館」の再整備と固有亜種ダイトウコノハズクの保全活動</b>  南大東島は海洋島であり、世界でもここだけにしか生息しない固有種が数多く生息している。その一方で、開発による環境破壊や外来種の侵入が進んでおり、島の自然を保全する活動が必要とされている。我々のグループが保全活動を行っている固有亜種ダイトウコノハズクもその一例である。2001年に島の自然環境を発信する場として「島まるごと館」が建設された。古くなった展示を更新することで、資料館としての価値向上が期待される。そこで、本活動では、ダイトウコノハズクの保全のための繁殖調査と「島まるごと館」の展示の刷新を行い、島の環境保全を学べる場を創出する。加えて、新しくした展示を活用して、島民への普及啓発活動を行う。

	助成先 代表者名	助成額 活動地域	テーマ 活動・研究の内容、目的、助成金の用途等
研究 の 部	植村 洋亮	50万円 北海道	<b>湧水環境は地域的な種多様性を高めるか？：溪流生態系における実証研究</b> 近年、気候変動にともなう淡水生態系の生物多様性への影響は顕著である。そのような中、湧水由来の生息環境は温暖化のレフュジアとなるなど種多様性の維持に寄与すると考えられ、その重要性が認識されつつある。しかし、地域的な種多様性に対して湧水環境がどれほど貢献しているか、また、どのような生態系機能をもつか定量化した研究は皆無である。本研究では湧水と非湧水がモザイク状に流れ出す火山性渓流域に着目し、異なる生息環境・異なる栄養段階間（無脊椎動物・魚類）で種多様性バタンを比較する。さらに、湧水における無脊椎動物の種多様性とバイオマスが高次消費者の魚類の成長へ、どのように寄与するか、そのプロセスを解明する。
	苗川 博史	21.2万円 神奈川県	<b>繁殖期におけるコシアカツバメ(Hirundo daurica)の減少要因を探る研究</b> コシアカツバメ(Hirundo daurica)は東南アジアなどから飛来する夏鳥で、国内の繁殖期においては減少種の1つに挙げられている。多くのコシアカツバメは、これまで中層住宅などに繁殖と生息が見られたが、近年の老朽化した中層住宅の建て替えに伴う外壁や塗装法の変化により営巣がしにくくなり、またスズメやカラスに巣が乗っ取られるか破壊され、繁殖地域の住人によって巣が撤去されることが相次いで起こっている。このため限られた地域に生息している現状にある。本研究は、コシアカツバメの個体数が繁殖期に減少している要因を探るため、神奈川県下を一例として新旧の中層住宅地の繁殖動向を調査することを目的とする。
	山本 悠斐	50万円 滋賀県	<b>身近な広葉樹ケヤキにおける虫こぶが生み出す生物多様性の解明</b> 生物多様性は様々な生物が相互に関わりあうことで維持されている。生物の中には周囲の環境を改変することで、他の生物に影響を与える生態系エンジニアと呼ばれる種がいる。生態系エンジニアの代表的な例として、ダム作りをするビーバーが挙げられる。身近な生態系エンジニアとして、公園等によく見られるケヤキの葉に虫こぶというこぶ状の突起物を形成するアブラムシが知られる。虫こぶは様々な微小生物の餌やすみかとして機能するため、ケヤキ樹上の生物多様性を向上させると考えられる。本研究では、ケヤキの虫こぶを取りまく生物間相互作用と生物群集の調査を行うことで、虫こぶが生み出す生物多様性の解明に取り組む。
	藤田 宗也	50万円 滋賀県	<b>大戸川の詳細な魚類相調査に基づいた復元目標の設定</b> 大戸川は滋賀県南部を流れる一級河川である。魚類は滋賀県レッドデータブック掲載の約15種や、県内で分布が限られる種、大戸川にのみ生息する種が確認されている。そのため、その希少性と特異性が専門家によって注目されており、包括的な魚類の分布調査が期待されている。しかし、中流域のダム建設や下流域の圃場整備が計画されており、大きな環境変化に伴う魚類相の劣化が予想される。大戸川における魚類相の記録は散発的な標本や暗黙知に留まっており、大きく環境改変された場合、保全に必要な基盤情報が存在しない。本研究では、標本採集と環境DNA分析を用いて大戸川流域内の詳細な魚類相を明らかにし、将来的な復元目標を設定する。
	宇高 寛子	50万円 京都府	<b>大型在来種ヤマナメクジが森林の多様性に果たす役割の解明</b> ナメクジ類は害虫と考えられがちであるが、落ち葉や死骸の分解や、種子や胞子の分散といった生態系で重要な役割をもっている。しかし、日本の在来種ナメクジ類の研究は遅れており、詳しい生態はわかっていない。本研究で対象とするヤマナメクジは、その名の通り山地や森林など自然が豊かな所に生息する大型の在来種ナメクジである。本種は樹表を登れるため、地表性の動物よりも多様な餌資源を利用していると考えられるが、その食性を含め生態には不明な点が多い。本研究では、ヤマナメクジの食性や行動、個体群密度などを調査することで、ナメクジ類が多様な自然環境で果たす役割について新しい知見を提供することを目的とする。
	環境動物昆虫学研究室 上田 昇平	45万円 大阪府	<b>フクロウの繁殖状況と遺伝的多様性に関する研究</b> 近年、フクロウの個体数は生息地となる里山の衰退や営巣に適した大径木の枯死・伐採などの要因から減少しているとされ、多くの都府県で絶滅危惧種に選定されている。我々は2019年から本種の衰退が顕著とされる大阪府南部の31地点に巣箱を設置し、本種の繁殖状況を調査しながら雛のDNAサンプルを採集してきた。本研究ではこれらのDNA解析を実施し、雛の栄養条件と遺伝的多様性の年次変動を推定することで本種の保全における巣箱設置の効果を解明する。本種は里山生態系のアンブレラ種として知られている。本研究の成果は、本種とその生息地となる里山環境の保全に資する重要な基礎資料を提供することが期待される。
	助成総額	465.7万円	